
地獄通信レポート

徳次郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

地獄通信レポート

【Nコード】

N4497C

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

『午前零時の帳じやうの向こう、晴らせぬ恨み、晴らします』 午前0時にだけアクセス可能という地獄通信。運よくアクセスできた者は地獄の使者、閻魔あいから黒いワラ人形を貰い、恨みを晴らす契約を結ぶ事ができる。しかし、誰かを地獄ひじりゆたかに送ると言う事は……都市伝説「地獄通信」を追う雑誌記者、聖裕ひじりゆたかはもう一つの地獄流し『地獄絵馬』の真相にせまる。

プロローグ Vol.1 (前書き)

地獄少女を知っている方がどのくらいいるかは判りませんが、原作を知らなくても読めるようにはしております…… (不定期更新)
色々挑戦してみたく思い、執筆しております。

この作品は地獄少女をなぞったモノではなく、設定を借りて描いた別のお話です。話の中心は「閻魔あい」ではありません。

プロローグ Vol.1

【プロローグ】

三途の川を渡らずに、そのまま流れに乗って下ると景色は次第に暗たんとして冷涼なものに変わる。

川面には浮かばれなかつた魂の灯籠とうろうが無数に流れている。

水は灰色に濁り、暗雲が頭上を埋め尽くす。

そこには昼も夜も存在しない。

やがて大きな黒い鳥居が見えてくる。

それは地獄の入り口。

その鳥居を潜った先は、燃え盛る業火の渦巻く真紅の闇!?!?……

地獄。

『彼女』はそこに住んでいるのだろうか……それは、誰にもわからない。

ただ、彼女の棲む世界は黄昏に包まれている。

午前0時、恨みの念を抱き地獄通信にアクセスできた者は、地獄少女に会うことができる。

そして彼女から受け取ったワラ人形に結ばれた赤い糸を解くと、恨みは聞き届けられ相手は地獄へ送られる。

三年前、地獄流しが横行するあまり、人々の間でその連鎖に歯止めが利かなくなった。

地獄少女はその連鎖を止める為に、連鎖の犠牲となった一人の少年を救う為に400年以上に渡って行ってきた責務を放棄した。

それ以来、地獄少女の噂は急激に収束して行った。

しかし今再び、その都市伝説が世間に広まりつつあった。

地獄少女は健在なのだろうか……

深夜0時、闇の静寂に紛れるように地獄通信にアクセスする誰かの姿があった。

漆黒の画面に燃え上がる火炎の証文。

打ち込まれた名前は『小林弘樹』

躊躇する事無く、送信ボタンはクリックされた。

ブツと音を立ててパソコンに映し出された画面は消えた。

ほの暗い部屋のクローゼットの扉が開いていた。さっきまでは確かに閉まっていたはずだ。

背中の後方で気配を感じた。しかし、その異様な気配に振り返る事を一瞬拒む。

気配は確かにあった。

しかしそれは、生きた気配とは違う何かだとわかる。

「呼んだ？」

小さな声が聞こえた。

消え入りそうに透き通った、それでいて頭の中まで響く声だった。聞き違いなどではない。そこには確かに誰かがいる。

ゆっくり振り返ると、少女が立っていた。

「これを受け取りなさい」

少女は言った。

「誰？」

「私は閻魔あい。地獄少女」

「本物……なの？」

閻魔あいと名乗った少女は、無表情のまま再び言った。

「これを受け取りなさい」

視線を彼女の手のひらに移すと、そこには黒いワラ人形が在った。受け取る手が震えた。

ワラ人形の頭には赤い糸が結ばれていた。
「あなたが本当に恨みを晴らしたいと思うなら、その糸を解けばいい。糸を解けば正式に契約は交わされ、相手は速やかに地獄へ流される」

少女は無表情のまま続けた。

「ただし、あなたも代償を支払う事になる」

少女の燃えるような赤い瞳は、吸い込まれそうなほど澄みきっていた。

「人を呪わばあな二つ。誰かを地獄へ流せば、あなた自身の魂も地獄へ落ちる」

少女の口元が微かに、ほんの微かに笑みを浮かべた。

「死んだ後の話だけだ」

【Vol.1】

都市伝説の一つに『地獄通信』というモノを聞いたのは、ひじりゆたか聖裕が今の部署に配属されてからの事だ。

「地獄通信？　ですか？」

「何だお前、知らないのか」

編集長が嘲るように言った。

「そんな事も知らないんじゃ、この業界でやっていけんぞ」

「それはこの雑誌に限りだろ」

裕は編集長に聞こえないようにぼそりと呟いた。

ある出版社に勤める彼は、今週付けでこの部署に配属された。それは都市伝説などばかりを特集しているボルカと言う雑誌だった。

巷に蔓延する噂の怪現象や謎のスポットなどを詳しくレポート取材する事で、着実に部数を伸ばしていた。

そして、そんな絵空事を追いかける取材は、今までスポーツ雑誌にいた裕には無縁だったのだ。

スポーツ雑誌と言っても、裕は車のレースを専門とする部署にいた為、全てがストイックだった。

昨年はF-1のコンチネンタルサーカスを追いかけて、まるまる海外で過ごした。

それが、いきなり都市伝説を追う雑誌だなんて、はっきりと落胆した思いが彼の中にはあった。

「いままで誰も真相を突き止められていない。しかも、地獄に落とされたと噂される事件は増える一方だ」

編集長の中村勝司は真剣な顔で言った。

「お前の腕なら、真相を突き止められるだろう」

「何で俺なんです？」

「お前、昨年のF-1でマクラーレンチームが極秘で導入していたアクティブデフを暴いたんだって？」

「それと都市伝説なんかを一緒にしないでください」

裕は半ば腹立たしい気持ちだった。

コンマ1秒を削る為に必死になるレースの世界と、真偽も定かでない都市伝説などを一緒にされる事への苛立ちが膨らんだ。

「いいか、火の無いところに煙はたたん」

勝司は真顔でそう言うと、裕に資料室へ行くように促した。

裕は資料を探し出してタバコに火をつけると、煙をくゆらせながらそれを眺めた。

……何が火の無いところに。だよ。昔のドラマじゃねえっての。

「あら、ここ禁煙です」

女性の声で裕は振り返った。

「灰皿なら携帯用をもってるよ」

裕はタバコを啜えたまま振り返って言った。

「そう言う問題じゃないでしょ」

高岡美佳。彼女は入社二年目だったが、かなり優秀な人材との事で、本社に戻って来てからは裕も噂は聞いたことがある。

「あなたの手伝いをするように言われました。高岡美佳です」

28歳の裕とは6つも年が離れているが、彼女は毅然としていた。

「ああ、俺は……」

「聖裕さんでしょ。知ってます」

「あつそ」

裕は再び資料に目を通し始めた。

「深夜零時きっかりにアクセスできて、それは恨みの思念がもつとも多い者だけに許される。なま半価な気持ちでは、恨みの受諾どころかアクセスする事すらできない。だから、普通の人がいくらアクセスを試みても、地獄通信のページをサイト内で見つけることは不可能に等しい」

美佳はそう言いながら、裕のタバコを口から抜き取って、流しの三角コーナーに捨てた。

「へえ、キミ詳しいんだ」

裕はタバコを取られた事も忘れて、思わず関心した。

美佳は三日前の新聞を事務机の上に置くと

「これ、おそらく地獄流しですよ」

小さな記事が赤ペンで四角く枠取られていた。

『小林弘樹さん（38）が行方不明……』というよくある記事だ。

「どうしてこれが地獄流しなんだ？」

美佳は机に寄りかかると新聞の記事を指差して

「だって、よく読んでくださいよ。夕食後書斎に入るのを奥さんが見てるんですよ。それから出かけた形跡は無いのに、彼は消えたんです」

「知らないうちに外出したかも」

「靴は全てあったそうです。それと、吸いかけのタバコも」
「書斎の中で忽然と消えたと……？」
「そうです。そして、忽然と消える現象こそが地獄に送られた証なの」

「本当かよ」

裕はいかにも胡散臭そうな視線で美佳を見上げた。

* * *

「それじゃあ、旦那さんが書斎に入った後家を出ている様子が無いのは本当なんですね」

「ええ、靴も全てありますし、サンダルもあります。もし外に出たのなら裸足で出かけたと思えないんです」

裕は、とりあえず三日前に行方不明になったと言うIT企業を運営していた小林弘樹の自宅へ来ていた。

一番近い事件から洗っていこうと思ったのだ。

「でも、もし自殺する気なら、裸足で出てもおかしくはないのでは？」

「ちょっと、そう言う言い方は……」

一緒に取材に来ていた美佳が、裕の背中を突いた。

「でも……会社も順調でしたし、あの人に自殺する理由なんてあったとは思えないんです」

妻の小林佐百合は、裕の質問を気にすることなく答えた。

「誰かに恨まれていたという事は？」

裕の斜め後ろ、しかもずいぶん下のほうから美佳の声がした。

裕は175センチと、男としてはごく平均的身長だが、美佳は152センチしかない為、彼の頭一個分下に美佳の頭が見えた。

「恨み……ですか？」

その言葉には佐百合も顔を曇らせた。

「誰かがあの人を連れ出したと？」

「いい、いいえ。可能性ですよ。ただの」

裕が付け加えた。

「私には判りません。でも、もし誰かに連れ出されたら、リビングにいる私が気付くと思うんですけど……」

「そうですね」

裕はそう言って美佳を促すと

「どうもありがとう御座います。また何かあったらお話を覗つかもしませので、その時はよろしく願います」

軽く会釈をして小林宅を後にした。

「もういいんですか？」

路上に停めた車に向う途中、美佳が不満そうに言った。

「奥さんは何も知らない。あれ以上訊いても無駄さ」

裕は運転席のドアを開けながら

「会社周辺をあたってみよう。成り上がりのベンチャー企業だ、恨みのひとつや二つ買ってるだろう」

しかしその甲斐も無く、小林の会社は立ち上げに際しても運営にしても、誰かに恨みを買っている様子は無かった。

「やっぱり地獄通信とは関係ないんじゃないのか？」

社に戻る車中で裕は笑みを浮かべるようにして言った。

それは、地獄通信その物を信じていない事を示していた。

美佳は黙ったまま、夕闇に暮れるビルを眺めていたが

「女性関係はどうかしら」

「女性関係も、目立ったものは無かったじゃないか」

「それは、彼がもみ消しているからかもしれないでしょ」

裕は仕方なく車を一端路地へ入れて方向を変えた。

交友関係、しかも女性関係についてはなかなか出てこなかった。裕は深夜遅くに帰宅する日が続き、もともと低かった熱意は完全に冷め切っていた。

そして、巷の噂話を必死で追いかける自分に、虚しさを感じた。この日も裕が帰宅したのは深夜の一時近くだった。

住宅街には静まり返った闇だけが広がり、飛び飛びに設置された街路灯が薄っすらと辺りを照らしていた。

アパートの前まで来た時、一人の男が裕の行く手を阻んだ。

「地獄通信の事を追うのは止めるんだ」

男は暗闇の中で、裕に言った。

「な、なんだよいきなり。あんた、誰だ」

「俺の事はいい。地獄少女を追っても、何もいい事なんて無いぞ。下手したら、お前も巻き添えをくう」

裕には、真顔でそんな事を言う男が、正常な精神状態には思えなかった。

「ただの都市伝説だぜ」

「都市伝説なんかじゃない。地獄少女はいる」

「あんた、会った事あるのか？」

男は小さくゆっくりと頷くと

「俺の先祖が400年以上まえに、彼女を作り出してしまったんだ」

裕は、男の言葉に呆気にとられ、一瞬言葉が出なかった。

「な、なに言ってるんだ？ 400年前の先祖？」

「とにかく、彼女を追うのは止める」

男はきびずを返すと、一度だけ振り返り

「忠告はしたぞ」

そう言って、街路灯の明かりを抜けて闇に消えていった。

地獄通信レポート

「謎の男？」

翌日、昨夜の出来事を裕から聞いた美佳は眉を潜めた。

「その男が地獄通信の調査を止めると？」

「ああ、何でも彼の先祖が400年前に地獄少女を作り出したとか
なんか」

「誰なのかしら」

美佳がそう呟いた時、二人を乗せた車は、都内の私立女子高前に
停まった。

「ここ？」

「そうらしい」

小林弘樹の女性関係を探っていた所に、彼と交際していたらしい
という女性が浮かび上がった。しかしそれは、何と高校生だったの
だ。

1ヶ月前に小林の周囲から彼女の姿は見えなくなったそうだ。

会社の連中には姪っ子だと言っていたらしいが、一定時期に限り
彼の周辺に姿を見せていた少女がただの姪っ子とは思えない。

調べた結果、小林の姪っ子は確かに存在するが茨城の実家近くに
住んでいるし、まだ小学生だった。

下校時間を狙ってやって来たが、学校前はやけに閑散としていた。

「何だか静かね。今日は休みとかなのかしら」

車を降りた美佳が言った。

「とにかく言ってみよう」

正門は完全に閉じられていた。

「やっぱり休校日か……」

すると、すぐ横の通用門から一人の女生徒が出てきた。

「あ、キミ。今日は休みなのかい？」

「いいえ、午前授業だったんです……けど」

応えた彼女は、不振な目で裕を見た。
女子高の近くをうろつく不審者は多いので、彼に対しても警戒しているのだろう。

「ああ、私たち雑誌記者なの」

そう言つて、美佳が裕の後ろから名刺を取り出して見せると

「うちの学校、雑誌に載るんですか？」

「いや……学校は載らない。ちょっと調べている事があってね」

裕はそう言つてから

「守口渚さんって知ってるかい？」

少女は少しガツカリした笑みを浮かべて「さあ……」と首を傾げた。

「校内にはもう誰もいないのかな？」

「まだ部活をしてる娘はけっこういますよ」

「そう……ここ、俺たちが入っても平気かな？」

「たぶん、ダメだと思います」

少女はキツパリと言った。

裕は通りに停めた車の傍でタバコを吹かしていた。

男はまずいだろうという事で、美佳が一人で校内に潜入したのだ。

もちろん女性であろうと本来部外者の校内立ち入りは厳禁だ。

そして30分、彼は5本目のタバコに火をつけていた。

「あ、キミたちここの生徒さんだよね」

通用門から二人の生徒が出てきたのを見て、裕は声を掛けた。二人

人共テニスラケットの入ったケースを肩にかけている。

「は、はあ」

「守口渚さんという娘は知らない？」

「その娘が何かしたんですか？ さっきも校庭で訊かれたんですけど」

「ああ、いいんだ。ちょっとした事でね」

彼もとりあえずは通用口から出てきた生徒を見かけると、名刺をかざして声を掛けていた。

「ねえ、知ってる。うちの生徒も地獄通信にアクセスした娘、いるらしいよ」

彼に声を掛けられた娘たちが立ち去る際に発した会話だった。

「ちょ、ちよつとキミたち」

裕は慌てて二人を追いかけるように呼び止めた。

「まだ何か？」

二人は振り返って、少し訝るように応えた。

「地獄通信にアクセスした娘って？」

「はあ？」

「今、話してたろ」

「え、ええ」

右側にいた少女は少し口ごもる様子で

「ただの噂だから、誰がって言うのは知りませんけど……」

「そうか……」

「どうしてそんな事訊くんですか？」

左にいた少女が言った。

「えっ？」

裕はどう応えようか一瞬躊躇したが

「実は、俺たちの雑誌は、そういう都市伝説の特集をしてるんだ」

「あつ、じゃあやつぱボルカの人？」

「えっ？ あ、ああ」

裕はその指摘に少しだけ面食らった。さっき彼女らに見せた彼の名刺には、出版社名しか書かれていなかったからだ。

「どっかで見た出版社名だと思ったのよ」

少女は楽しげに言った。

「キミらはみんな地獄通信の事は知ってるの？」

「普通は知ってるよね」

「そうそう、よっぽどとくくなきゃね」

二人の少女は顔を見合わせて頷いた。

「アクセスした人って、本当にいるのかな？」

「どうだろう。みんなやってみるけど、そんなサイトは無いのよね。関連記事の載ったサイトばっか山ほど検索に引っかかるけど」

左の少女はそう言っただけを尖らせた。

「でもさ、よほどの恨みを持ってないと、そのサイトは出てこないんでしょ」

右の娘が付け加える。

「そう言えば、佐織が昔地獄通信の事でしたっけって訊かれましたってたっけ」

「沙織って？」

「中学の友達で、今は別の学校に通ってるけど」

「その、しつこく訊かれたっけのは？」

「それも中学の時よ。三年くらい前だったと思うけど」

裕はサマージャケットの内ポケットから手帳を取り出して

「その娘の事、詳しく教えてくれないかな」

「あんまりその時のことは覚えてないけど、確かに地獄少女について訊かれたよ」

中村佐織は、裕に向かってそう言った。

そして、彼女がある男にそれを訊かれたのは三年前ではなく四年前だと言う。

「ぶつちやけた話し、キミは地獄通信にアクセスしたのかい？」

佐織は表情を曇らせてひと呼吸間をあけると

「知らない」

「えっ、だってキミの事だろ？」

「だからその頃の事はよく覚えてないし……それに、そんなの言えません」

彼女はそう言って、家の中に戻って行った。

裕は、佐織という少女の家を女子高の前で会った娘から聞きだしてここまで来ていた。

少しだけと言う事で玄関先へ呼び出し、中学の頃の話を読み取っていたのだが、彼女はあまりその頃の事を覚えていないと言う。

本当か嘘かはわからないが、彼女が地獄通信へのアクセスを成功させたであろう事は、裕には読み取れた。

裕の携帯電話が鳴った。

「ちよつと、何処にいるんですか？」

女子高に置いて来た美佳からだった。

「ああ、わりい。急用ができてさ」

裕はそう言って頭をかくと、「で、そっちはどうなった？」

「ばつちり、話は聞けましたよ」

「そうか、直ぐに迎えに行くから」

裕は急いで美佳を拾った後、一端社に戻る為に車を走らせた。

「で、どうだった？」

「やっぱり交際してみたい」

美佳は車の窓を開けて、外の風を車内に取り込んだ。

「でも、最初は援交だったようね」

「援交？」

「でも、彼女が小林弘樹に本気になったみたい」

「本気？　だって相手は30過ぎだぜ」

「歳は関係ないって事なんですよ」

裕は「へえ」と納得いかない相づちをしてから

「それで？」と、前を見たまま言った。

「小林にとっては、お金を出さなくていい都合のいいだけの援交相手だったのかもね。潮時だからと言って、ひと月前に関係を断ち切られたみたい」

「一人と長く続けると、足も着き易いからな」

裕も窓を開けると、タバコを啜えた。

「ちよつと、この車禁煙でしょ」

美佳はそう言ったが

「それで？　渚は地獄通信にアクセスしたって？」

美佳はタバコの事は諦めて話を続けた。

「それが……返事は聞けなかったの。ただ、あんな奴、流れて当然だつて」

「地獄へ流す……か」

裕はそう呟いて、半分になったタバコを、灰皿に擦り着けた。

二人は社へ戻ると、再び資料室へこもっていた。

「ねえ、聖さんは何処に行ってたんです？」

裕は、四年前に地獄通信を使ったらしい少女の話の話を聞かせた。

「その娘もアクセスしたのかしら」

美佳は小さな流し場で、入れたてのコーヒーをカップに注ぐと一
つを裕に差し出した。

「おそらくな」

裕はコーヒーを美佳から受け取ると、スチールの棚から三年前の
新聞記事をまとめた部厚い縮小版の冊子を取り出してページをめく
った。

「四年前の事件？」

「ああ、佐織の近辺で何かが起きているはずだ」

裕のCANは的中した。中村佐織が通っていた中学で当時同級生の
失踪事件が記事として載っていた。

その少女もまた、外出した気配の無いまま真夜中に自室で消息を
絶ったらしい。

「もう、完全に地獄通信を信用しているみたいね」

その記事に食い入る裕を見て、美佳が笑った。

「証拠が何も無いんじゃ、信用するとかしないとか、それ以前の問
題だろ」

裕は見ていた記事をボールペンで突きながら

「地獄流しの証拠は無いのか？ 彼女達はどうやって相手を地獄へ
送るんだ？」

「地獄少女にのろいのワラ人形をもらうらしいわ」

「そのワラ人形は？ その後どうする？」

「消えるっていう噂よ」

美佳は自分で入れたコーヒーを啜った。

「消える？ 跡形も無く？」

美佳はカップを手に、何度も頷いた。

「だいたい地獄少女って何モノだ？ 何処に住んでる？ 判らない
事だらけだ」

ボールペンを机に放り投げる裕を見た美佳は

「益々本気で調べたくなっただでしょ」

「謎の失踪事件があるのは事実だ。俺はその謎を解き明かしたいだ

けさ
「

裕はそう言って顔を上げると、コーヒーを啜った。

裕は大きな書店に出向いていた。ビルの一階から三階までを使用した大きなフロアーには専門書も数多く取り揃えられている。

彼は地獄通信について何か資料になるものはないか探しに来たのだが、所詮都市伝説。最初は雑誌コーナーを見たが、胡散臭いものばかりが目について、参考にはならないと思った。

眉唾な噂を載せる雑誌が蔓延している中で、これと言ったものは無かった。

裕もまた、その類の雑誌の為に取材しているも事実だが……民話や歴史のコーナーを覗くと、気になるモノが目についていた。

『地獄絵馬』その本にはそう書いてあった。

黒い絵馬に恨みを晴らしたい相手の名前を書き込んでとある神社に祭ると、願いが届くというものだ。その風習は古来から伝わるものだという。

それはまるで、今で言う地獄通信だった。

長野県の奥地にある貧祖な村の写真が載っていた。

「長野かあ……」

ちよつと遠いな、と思いながらもその本を手に再び通路を歩いた。その次に目に留まったのは自伝、エッセイなどノンフィクションコーナーだった。

タイトルはまさしく『地獄通信』だった。

裕は思わずそれを手にとって開く。

地獄通信の事が事細かに綴られていた。しかも、閻魔あいが住むという、終日夕陽が注ぐ黄昏の草原の事までもが詳細に書き記されている。

まるで、その著者が自分で見てきたような綴られ方だった。裕はその内容に思わず読みふけてしまふと我に帰る。

彼は手にした書籍をひっくり返して著者を見た。

柴田 一……著者名にはそう書いてあった。

「柴田はじめ……？」

……彼はまるで地獄少女を直接見たような書き方をしている。彼も地獄通信にアクセスした一人なのか？

裕はその本も手に抱えると、レジへ向った。

裕は柴田はじめという著者の本を隅々まで目を通した。それは創作にはあまりにもリアルで、まるで実際にその目で見たことを綴っているかのようにだった。

もちろん、ノンフィクションというジャンルで出版されているのは確かだが……

「まさかな……」

思わず呟く。

最後には地獄流しは決して許される行為では無いと書き記し、地獄少女に携わる事自体をタブー視する文面で締めくくられていた。

そして裕は、その文面にこの男の姿が何か自分の記憶と重なるのを感じた。

靄もやが掛かったような思考の片隅で小さく揺らいでいたそれを、裕は捕まえた。

……この男。以前俺の前に現れたのは、この男なのでは？ 確かではないが、彼の直感や憶測、今まで経験して培ってきたものがそれを示していた。

裕は携帯を手にとると、美佳に連絡を入れた。

「柴田一？」

美佳は電話口でそう応えた。

「聞いた事無いわね。作家？」

「いや、元々はジャーナリストらしい」

「だったら聖さんの方が詳しいでしょ。あたしよりこの業界長いんだから」

「畑が違つと知らないもんなんだよ」

「じゃあ、明日にでもデスクに訊いてみるわ」

「ああ、頼む。俺は直接この出版社に行つてみるから」

裕はそう言つてから

「ああ、それと守口渚の件なんだけど」

「なに？」

「彼女の胸に痣がないか確認できないかな」

「胸に痣？ それと地獄通信と何の関係が？」

「地獄少女と契約を交わした人間の胸には刻印が押されるらしい」

「刻印？」

「契約を交わした刻印だ。それは生涯消えないそうだ」

「判つたわ。でも胸だから確認できるかは保障できないわよ」

「ああ、男の俺よりは成功率が高いだろ」

裕は電話を切ると、再びその本を開いて、冒頭から読み返した。

「柴田？」

ボルカ編集長の中村勝司は眉にシワを寄せて呟くと、書類が積み上げられた机の端に置いてあつたコーヒーを口にした。

「そついや、聞き覚えがあるな」

「ジャーナリストで地獄通信に詳しいって」

美佳が訊いた。

「そうだ……柴田は当時地獄少女を追つていたんだ。三、四年前にも一度こんなブームみたいなものがあつたからな」

勝司は再びコーヒーを口にすると、今度はタバコに火をつけ

「ただ、具体的な取材や記事を出してはいなと思つぞ。あればもっと記憶に残つてるからな」

そう言っ て天井に向けて煙を吐き出した。

「何処で働いていたんです？」

「フリーじゃないか」

「フリー……ですか」

「本来は芸能ネタで食ってたはずだな。そんな記憶はある。地獄通信の事は当時も各誌で報じていたし、その頃は俺も現場を走り回っていたが、彼の記事は見た事が無い。何か別の視点で追いかけていたのかもな」

「別の視点ですか？」

美佳は怪訝そうに言った。

「記事には出来ないような、いや記事にしても仕方がないような事か」

そこで勝司の机の電話が鳴った為、話は終わった。

「彼は他にも執筆を？」

裕はB社という出版社に来ていた。自費出版を請け負うことでそれなりに有名な会社でもある。

「いや、彼とは以前から付き合いはあったが、いきなり本を造ってくれと言って来たのはこれっきりさ」

出版社社長の渡辺が言った。

自費出版部署に問い合わせたところ、柴田は直接この渡辺社長を通して依頼して来たというのだ。

「彼はどうしてあの本を？」

「さあね、以前から何かを追っているのは知ってたけど、いきなり地獄通信とはね。自分がよく記事を提供している出版者では断られたいんだ」

「で、彼は今何処にいるかわかります？」

渡辺は部下が置いていったお茶を静かに啜ると

「いや、まったく音沙汰無いんだ。今は何処にも書いてないようだね」

そう言っただけタバコを啜ると、応接テーブルに置いてあった自由の女神を模造したライターで火をつけた。

「ジャーナリストなんて、記事を書き続けなけりゃ埋もれるだけさ」

裕はひと通りの質問を終わらせると、応接室の安いソファを立ち上がった

「柴田一がよく書いていた雑誌って、判りますか？」

それだけ訊いて、社を後にした。

……彼はどうしてあんな本を？そして今いったい何処に？

裕は渡辺が教えてくれた出版社へ向ったが、現在の彼に関する情報は得られなかった。芸能ゴシップ誌を得意とするそこでも、地獄通信について追っていた柴田の詳細は解らない。

フリージャーナリストは社に拘束されないのだから当たり前的事だが……

一つ解った事は、彼には一人娘がいて何時も父親の柴田について歩いていたそうだ。母親はいないという。

「ああ、もう何処も行き詰まりだな……」

裕は大通りの歩道に佇んで頭を掻き毟った。

裕は会社へ一端戻って、美佳と落ち合った。

美佳は彼女なりに柴田の事を調べたらしいが、現在の詳細はやはり掴めなかったという。

「子供はどうしたんだ？」

「その娘も判らないのよ。転校先が不明なの」

「不明？」

「東京から神奈川の学校に移って、そこまでは確認できたんだけど、それ以降が判らなくて」

美佳はコーヒークップに注ぎながら言った。

裕はタバコを啜えると、天井を見上げた。

「どっか、田舎にでも引っ込んだのかな」

「ところで、地獄通信の事、いよいよ信じる気になったの？」

美佳はコーヒークップを口に着けながら、楽しそうに笑った。

裕はタバコの煙で輪を作りながら

「それを説明するんじゃないか」

「そう言っつて、彼もコーヒークップに口を着けた。」

「そう言えば、胸の痣の件はどうなった？」

「ダメだった」

美佳は両手のひらを肩の高さに上げて言った。

「場所が場所なだけに、他人が確認するのは至難の技ね」

「そうかあ」

裕は、安っぽい事務用の椅子にもたれて、両手を頭の後ろで組んだ。

その夜、美佳は自宅の最寄の駅を降りると、コンビニで買い物をしてからアパートへ向っていた。

彼女の住む住宅街近辺は、遅い時間にも関わらず人の歩く姿が見えるので何時も安心する。

しかし、それでも駅から離れるにしたがいひと気は減って街灯の明かりだけが頼もしい風景へと変わってゆく。

アパートの前まで来た時、前後には誰の影もなかった。

しかし、フツと電柱の陰から誰かのシルエットが浮かび上がった。街路灯の光を浴びて、朧気にそれは浮き上がった。

美佳は半ば条件反射で身構えると、それが相手に気取られぬように歩く歩合いを変えなかった。

電柱の脇に立つ人影が女性である事が判る距離まで来ると、美佳はホッと心の中で息をついた。

「美佳さん……だよね」

長い黒髪に切れ長の目、どこか現実離れた美形な顔立ちが水銀灯に青白く照らされていた。

淡いピンクのタイトなスーツは、彼女の豊満な体型をより強調させている。

「そ、そうですけど」

美佳は足を止めると、再び警戒心で身を包んだ。

「地獄通信を探るのは、止めた方がいいよ」

目の前の女性は表情を変えずにそう言った。

「あなたは誰？ 柴田一の知り合いですか？」

「柴田？」

女は一瞬戸惑いの表情を浮かべたが、それを微かな笑みにかえて

「柴田って、柴田親子の事かい？」

「やっぱり、柴田さんを知ってるんですね？」

「知ってるって言うか、まあ、昔ね」

「昔？」

美佳は自分より背の高いその女を見上げていた。

「そんな事より、地獄通信から手を引きな。ろくな事にならないよ」

「あなたは？ あなたは誰なんですか？」

「あたしの事はどうでもいいのさ」

女は切れ長の、しかし何処か優しさのある眼差しで美佳を見つめると

「とにかく、地獄通信にこれ以上首を突っ込むんじゃないよ」

長身の女は、路地の暗がり溶け込むように消えていった。

美佳は、自分が何を見たのか判らずに、少しの間その場に佇んでいた。

裕はコンビニでビールを買って帰宅した。もう12時を回っているが、最近では早く帰宅できた方かもしれない。

アパートの敷地に入ると、二階に上がる階段の前に男が一人立っていた。

ひじりゆたか
「聖裕さん？」

その男は尖った顎に涼しげな眼差し。世間で言うイケメン顔と言うのだろうか……黒く長い前髪が左の目と頬を隠していた。

「キミは？」

「俺の名はレン。あんたに忠告をしに来た」

「忠告？」

「地獄通信について調べているようだけど、ほら、他の連中みたいに適当に面白おかしく書いときなよ。真実を追究するのは、あんたの為にも好くないぜ」

「お前、柴田の仲間か？」

「はあ？ 柴田？」

レンと名乗った男は視線を少し上に向けるとハツとした表情を見せて

「そついや、そんな奴いたな」

「柴田親子は今何処にいるんだ？」

「そんなの俺が知るわけないだろ」

「仲間じゃないのか」

レンは涼しげな笑みを浮かべて

「ぜんぜん」と首を振る。

「じゃあ、どうして地獄通信を調べるなど？」

「無意味だからさ」

「何が無意味なんだ？」

「調べたって意味ないだろ。今も確実に誰かがアクセスして、誰か

が地獄に流されてるんだ。それを雑誌に掲載したところで、何の意味がある。地獄通信のアクセスが増えることはあっても、地獄流しを防ぐ事は出来ないんだぜ」

「真実なら、なおさら報道する義務がある」

「あんなゴシップ雑誌、本当の事を書いたって嘘を書いたってたいした変わりゃあしないだろ」

月明かりの微かな光は、レンの瞳に吸い込まれるように映り込んでいた。

「お前……何者だ？」

裕はカンの鋭さで、レンが只者ではない事を感じ取った。

「じゃあ特別に、これだけは教えてやるよ……俺は以前地獄少女に仕えていた者さ」

レンは肩をすくめるようにして再び笑みを浮かべ

「もつとも、今は仕事も干されて暇な毎日を送ってるがな」

レンはそれだけ言うと、アパートの階段を勢いよく駆け上がった。

「おい、待て」

裕も慌てて彼を追いかける。

しかし、彼が階段を上りきった時、既に男の姿は無かった。

裕は二階の部屋のチャイムを次々に鳴らしてみたが、レンと名乗った男の姿は何処にも見当たらなかった。

そして、一番奥の自分の部屋。その一つ手前のドアの前に立った。

「ここは確か爺さんの一人暮らしだったよな」

裕はそう呟いて、自分の部屋へ行こうとした。

「どなたかな？」

その時ドアが静かに開いた。

色黒で丸禿げのお爺さんは、もう直ぐ夏だと言うのに首には紅いマフラーを掛けていた。

「あ、いや」

裕は一瞬言いよどんだが、顔を合わせたついでだと思い

「長い前髪で顔を半分隠した若い男を見ませんでしたか？」

「さあ、わしはこの通りジジイの一人暮らしなもんでな」
温かみのある笑顔でその男は言った。

「そうですね。すいません、こんな夜遅くに」

「いや、いいって事さ」

裕はそう言われて、いそいそと自分の部屋へ戻った。

……おかしい……あの男は何処に消えた。それともあれは人間じゃなかったのか？ 裕は一瞬でもそんな事を考える事に思わず自嘲した。

点けっ放しのテレビは深夜の通販番組が流れていた。裕はそれを見るでもなく、何となく視界に捉えるだけだった。

二本目のビールを半分以上飲んだ時、キッチンの暗がりにもふと人影が浮かんだような気がした。

「誰だ、誰かいるのか？」

そんなはずはない……彼はそう思いながらも、さっきの事があった為思わずさげんだ。

しかし、それは気のせいではなかった。錯覚でも幻覚でもない。闇の粒子がザワザワと集まり黒い影を造り出していた。

それはあつという間に立体的に浮き上がり、完全な人の姿を現した。

栗色の長い髪が肩に掛かって背中に柔らかく流れていた。真っ白な顔に浮かんだ二つの瞳は燃えるように紅い。

何故か懐かしいデザインのセーラー服を着ていた。

歳は……12、3歳にも見えるし、15、6歳にも見える。

「じ……地獄少女か？」

直感でそう思った彼は、それを訪ねる事が怖かったが言葉を発せずにはいられなかった。思わず声が震えた。

裕を見つめる真っ赤な瞳は、全てを呑みこんでしまいそうなほど澄み切っていた。

「し、しかし、柴田の本では地獄少女の髪は真っ黒だと書いてあったが……」

裕は一人ごとのように呟いた。

「それは前任者よ」

少女が小さく口を開いた。

無表情な装いは、人間味は無くまるで人形のようだ。ただ燃える瞳だけが煌々と輝いて裕の全てを見据えていた。

「前任者？ どういうことだ」

「わたしは後継者」

「地獄少女は何人もいるのか？」

「彼女は400年以上に渡って役目を果たし、わたしに受け継がれた」

「前の地獄少女はどうした？」

少女は小さく首を横に振ると

「わたしは知らない」

「キミは、何者なんだ？」

「わたしは閻魔あい。地獄少女」

少女は望遠レンズを引きにしたように後へ遠のくと、台所の闇に溶け込んで消えてしまった。

裕は自分の目が信じられず、思わず両目を何度も擦り上げた。

「俺……もう酔っちゃまったのか？」

翌日裕が出社すると、資料室で待っていた美佳が慌しく口を開いた。最近の二人にとって、この資料室が仕事場のようなものだ。

「聖さん、あたし昨日の夜会ったんです」

「な、なんだよいきなり。誰に会ったんだ？」

裕は自分の会ったあの青年、いやもしかして地獄少女に美佳も出くわしたのかと思った。

「何だかよく判らない女性だったんですけど」

「何だよそれ」

「でも、地獄通信を追いかけるのは止めろって」

「どんな女だ？」

「何だか色白で、でも妙に整った美形で、しかも胸が大きくて……」

美佳は自分の胸が小さいので、昨晚の女のプロポーションがよほど印象に残ったらしい。

「胸？ 胸はどうでもいいんだよ。見覚えのある女か？」

「いいえ、全然知らない女性よ。何だか透き通るような肌をしていたわ」

裕は自分の会った青年を思い出していた。彼もまた、月影に透き通るような肌をしていたからだ。

「それで？ 他には何て？ 地獄少女に仕えていたとか言ってるなかつたか？」

「い、いいえ。それは言っていないけど。そうなの？」

美佳は思わず訊き返した。

「いや、俺にも判らない。実は昨日俺も……」

裕は自分の会った青年、そして閻魔あいと名乗る少女に会った事を美佳に話して聞かせた。

「地獄少女は実在するって事？」

話を聞き終えた美佳は言った。彼の言葉を疑う事は無かった。

「柴田一。彼を見つけ出そう。彼から話を聞きたい」

裕は三年前、四年前の記事を手当たり次第探し始めた。何でもいい、地獄流しに関係しそうな記事を探した。

三年前、地獄通信の流布が巷を騒がせていた。一端収束したそれは、今再び高校生の世代を中心に密かに囁かれている。

裕と美佳の二人は長野新幹線に乗っていた。

「地獄絵馬と柴田と何か関係があるの？」

「いや、ないだろう。ただ、地獄絵馬は地獄通信のルーツのような気がするんだ。とりあえずそれが知りたい」

裕は窓際に座る美佳の頭越しに、窓の外の風景を眺めた。

柴田の行方がかめない為、もう一つの気になる方へ彼は視点を移していたのだ。

二人は長野駅でレンタカーをチャーターすると、そのままある村に向った。

鬼城里村おにしろ。昔鬼が城を建てて住んでいたと言い伝えられる古い村だ。

長野駅を出て小一時間。街から離れた山間にその村はあった。

国道からしばらく入ったその場所は、田畑が広がりまばらな民家の屋根が淋しく並んでいた。

「すみません」

田んぼ沿いの県道で、裕は一人の男を呼び止めた。人のよさそうな50歳前後の、いかにも農業が染み付いた風貌だった。

「この辺に地獄絵馬があると聞いてきたんですけど」

「あんたら、何処から来たか知んねえが、そんなもん興味半分ですもんねえぞ」

その男は微笑んで言ったが、目は笑っていない。

「地獄絵馬があるのは本当なんですね？」

「さあなあ、あるかも知れんし、そんなもの無いのかも知れん」
そう言つて、男は再び笑みを作つた。

「この辺に旅館とかあります」

男に近い助手席の窓から美佳が訊いた。二人のやり取りの間を交える為もあつた。

「ここを道成に行くとき少し山を登るんだが、その中腹に白鬼しろきりよかん旅館てのがある」

男は美佳と裕の両方を交互に見るように言つと

「悪い事は言わねえから、地獄絵馬なんて物騒なものを探すのは止めとけ」

「そ、そうします。それじゃあ」

裕はそう言つて、車のアクセルを踏んだ。

ルームミラーで後方を確認すると、男はしばらくの間裕たちの車を見つめていた。

県道を道成に行くとき山道に差し掛かつた。男が言つた通り、それを少し登ると分かれ道に出て、一方には『白鬼旅館』と言う看板が立っていた。

「白い鬼なんていたのかしら」

美佳が看板を眺めて言つた。

裕たちはとりあえず旅館にチェックインして荷物を持って部屋に案内された。

「お食事は七時でよろしいでしょうか？」

「はい」

「お風呂はいつでも入れますので、何かありましたらお呼びください。ごゆっくりどうぞ」

「あの……」

帰りかけの動作に入った女中に美佳が声をかけた。

「白い鬼って書いてしるきだなんて、変わってますね」

「ああ、そうですね。この辺りには昔白い鬼がいたそうですよ」

「白い鬼？」

「へえ、鬼って赤と青しかいなのかと思ってた」
裕が横から口を挟んだ。

「そうですね。珍しいのは確かです」

女中はクスリと笑うと

「地方によつては黒い鬼もいるらしいですよ」

「白に黒ねえ」

美佳が言った。

「この辺りは地名の通り、鬼の住んでいた由来が多く伝わっています。その鬼は人々の恨みを晴らしてくれたそうです」

裕はその言葉にハツとして息を呑んだ。

「恨みを？」

「その代わり、自分が死んだ時に鬼に魂を喰われるそうです」

「それは、地獄絵馬で依頼を？」

女中が裕の方をハツとして見た。

一瞬の沈黙の後、彼女は笑って

「さあ、それはどうかしら」

女中はそのまま後ろへ下がって、部屋の敷居を跨ぐと

「それではごゆっくり」

そう言って、部屋を出て行った。

「鬼が恨みを晴らす……か」

裕は呟くように言った。

しかし美佳はその言葉に応えず

「ていうか、どうして私と聖さんが同じ部屋なんですか？」

木目のきれいなテーブルを手のひらでパンツと叩いた。

「仕方ないだろ。予算もないし。それに、取材って解らない方がいいかもしれない」

「それはそうだけど……」

美佳は不服そうに部屋を見渡した。

くの字型の少し広めの部屋で、大きな窓際は板の間になって籐製の椅子とテーブルが置いてある。しかし、部屋の中に仕切り戸はなかった。

「ま、そんなに気にすんなよ。襲ったりしないから」

裕はそう言っつて、湯飲みにお茶のティーバックを入れてお湯を注いだ。

美佳は小さく肩をすくめると、立ち上がって窓の外を眺めた。

「ねえ、あそこに神社があるわね」

板の間に出て外を眺めていた美佳が言った。

「ん？」

裕も板の間に出る。

窓の外は緑が生い茂り、浅い谷の下には川が流れていた。その向こう側も木々が生い茂り、他の建物は見えない。しかし、少し上の山の斜面、生い茂る木々の間から微かに紅い鳥居が見えた。

じつとそれを見つめていた裕は

「よし、日が暮れる前に行つて見よう」

そう言っつてテーブルに飲みかけのお茶を置くと、美佳を促して部屋を出た。

夕暮れにはまだ時間があつた。旅館を出た裕と美佳は小さな谷を渡る橋を探した。旅館の裏を回って細いあぜ道を歩いた。

「女将さんに訊いた方が早かつたんじゃない？」

美佳が言った。

「いや、この連中はあまり質問されるが好きじゃないらしいから裕はそう言いながら木立の隙間から谷間を見渡していた。

「この道が何処に続いているか。だよな」

そう言っているうちに、あぜ道は二股に分かれて。そして、左の先には小さな橋が見えた。

「ほうら在った」

裕がそう言つて笑いながら美佳の肩をポンツと叩いた。

黒い小さな橋を渡ると、小道が山を登っていた。それをしばらく行くと左に小さな石段が見えた。

「これね」

美佳が裕の後ろから覗き込むようにして言った。

細い石段は少し曲がりながら、だいぶ続いていた。

「長げえな……」

裕がぼそりと言つた。

「もつ年なんじゃないの？」

美佳がそう言つて笑つた。

右にそして左にうねつた石段をしばらく登ると、ようやく紅い鳥居が木立の間に見えた。

「あれだ」

裕はそう言つて足を速めた。美佳もそれを追う。

旅館の部屋から見えた小さな鳥居は思いの外大きかった。

石段を登りきると広い敷地が現れて、石畳が続いた先にやしらが建っていた。

途中、左右には石の灯ろうと祠があつた。石灯ろうは、緑コケで覆

われて黒々とシミが出来ている。

正面のやしろに近づくと、紅い壁色が日焼けと風化で薄茶色に変色していた。

「けっこう古いのかな」

裕は呟くように辺りを見渡した。

やしろの横には絵馬を掛ける為の板があつて、それも色が剥げ、古く朽ちていた。

「これは絵馬を掛ける場所だな……こんな所に願掛けに来る奴はいないんだろうな」

彼はそう言いながら割れた木の板を眺めた。

「ねえ、見て」

美佳がその裏側に回って声を上げた。

裕も彼女に呼ばれてその裏側に回った。

「こ、これは……」

板の裏側も長い間雨にさらされた為に黒々と変色していた。

そかしそこには真つ黒な絵馬が一つ掛けてある。

『西村こずえを地獄へ送って下さい T・M』

その絵馬には白いインクでそう書かれていた。

「これは……これが地獄絵馬なのか？」

「こんな黒い絵馬なんて、何処で売ってるの？」

美佳が言った。

裕も当然同じ事を考えた。しかし

「いや、これは自分で黒く塗ったんだ」

「えっ？」

「よく見る。おそらく普通の絵馬を自分で塗ったんだよ。ポスターを書くときに使うような不透明インクのマーカーを使ったんだろう。そして、同じマーカーの白色で文字を書いたんだ」

「何故こんな事を？ これで効力があるの？」

「それは判らないが、地獄絵馬を知ってる人間がいる事は確かだ」
そう言つて裕が何気なく見上げた空は、何時の間にか黄昏色に染

まり、鳥居の影が黒々と地面を這うように伸びていた。

西の空が茜色に染まり、東の空は緋色に変わり始め、頭上に浮かぶ雲はオレンジ色に輝いていた。

ガサツと林で音が聞こえた。

「誰だ」

裕は反射的に音のした方に向って叫んだ。

黒い人影が鳥居の方角へ走った。

「待て！」

裕はそれを追いかけて走り出した。

小さな祠の後の竹林を回って走る影に、鳥居の前で追いついた。

裕はその影に手を伸ばした。

「きゃっ」

そう叫んだ影の主の手首は、異常に細かった。

「な、なんだ……」

裕の目の前には少女の脅える顔があった。

「キミは誰だ？ こんな所で何をしてるんだ？」

「ちよつと、聖さん、乱暴はやめて」

美佳が後を追って駆けて来ると、そう言って裕の肩に手を乗せた。

「いや、乱暴なんてしてないって」

「でも彼女、脅えてるじゃない」

美佳はそう言って、裕の手を少女から離れた。

「ここで何をしてたの？」

少女はジーンズに黒いTシャツというラフな格好をして、束ねた髪を後で結わえていた為、夕闇に浮かぶ影では男女の区別がつかなかったのだ。

「あなたたちこそ、誰ですか？」

少女は唇を震わせながら言った。

三人は鳥居の下の石段に腰掛けて話をしていた。
少女の名前は水島千春といった。

「キミがああ絵馬の主か」

裕が笑顔を見せて言った。

「そんなに憎い人がいるの？」

美佳が訊いた。

千春は小さく頷くと

「あたし、ずっといじめになんて遭った事無かったのに……あの娘が転校して来てからクラスのみんなともううまくいかなくなってる」

……千春は元々明るくて活発な娘だ。

生徒数の少ないこの学校には、昔から酷いいじめは無かった。

もちろん、多少の派閥あらしのようなものはあったが、複数で一人をただ何となくいじめて楽しむような事はほとんど無い。

多少、それに似た事はあっても、とにかく千春はそんな事からは縁遠い存在だった。

仲の良い友達と一緒に何時も楽しく、時折教師の悪口を楽しんだりしながらごく普通に過ごす毎日だった。

そんな時、西村こずえが群馬から転校してきた。

最初に仲良くなったのは千春だった。彼女の伝で、あつという間にこずえはクラスに溶け込んだ。

しかし……

こずえは次第に満足しなくなっていった。

群馬の前橋の高校では人気者だった彼女は、ここではただのクラスの一員にすぎない。

友達の多い千春に、次第に嫉妬し始めていた。

実際は千春だって、クラスの一人に過ぎず、そんなに目立った存在ではない。しかし、ある放課後、こずえと一緒に宿題をしようと友達を誘った。

その娘は先約があった為に断った。

その相手は千春だったのだ。

誰にも悪気は無かった。その娘は先に千春と約束した為、「じゃあ一緒に」とかは考えずに単純に断っただけだ。

しかし、こずえは仲間はずれにされたと思った。

燃え上がるねじれた憎悪は、歯止めが利かなかった。こずえは他の友達に、千春が陰口を言っていると言いつらして彼女を孤立させた。

仲間はずれの儀式は、始まれば終わりを知らない。

千春は完全にクラスで孤立して、時には教科書や外履きの靴が無くなった。

首謀者は判っていたが、その理由は彼女には判らなかった。

彼女なりに我慢の限界が来ていた。何かに縋りたかったのだ。

……

……………

「絵馬に名前を書いた彼女が、いじめの首謀者ってわけか」

千春は再び頷いた。

「でも、地獄絵馬なんて、効き目があるの？」

美佳がそう訪ねると

「判らない……」

千春は呟くように言ってから

「この事、雑誌に載るんですか？」

瞳を激しく曇らせた。

「いや、それはないから安心して」

裕はそう言って笑みを返すと

「この辺では、まだ地獄通信の噂は無いのかい？」

「あるけど、パソコンを個人でもってる子なんてめったにいないよ」

「そ、そうなんだ……」

裕は思わず苦笑した。

この辺りはそれだけ田舎という事なのだろうと思った。

「あたし、もう帰らないと」

千春の言葉に裕は辺りを見渡して

「ああ、だいぶ暗くなっただな。送っていくよ」

空は完全に緋色に変わり果て、パラパラと星の瞬きも見え始めていた。

三人は一緒に石段を下って橋を渡った。

「家まで送るよ」

裕が千春に言った。

旅館の裏まで来た時には、完全に夜空に星屑が広がっていた。

「大丈夫です、こここの敷地の向こう側、あたしの家直ぐですから」

彼女はそう言って駆け出すと、駐車場の街灯を横切って姿を消した。

その頃、自作の地獄絵馬を掛けた神社のやしろには、黒い影が在った。

霧のように闇が集まってそれが密度を増すと、人の形を造り出した。

真っ黒な塊は、白く透き通るような肌色に変わる。

見開いた赤い瞳の輝きは絵馬に記された名前に注がれ、栗色の長い髪が音も無く月影にそよいでいた。

VoI・10 (前書き)

この作品は地獄少女をなぞったモノではなく、設定を借りて描いた別のお話です。

話の中心は「閻魔あい」ではありません。

翌朝朝食を持ってきた女中に、裕はこの村にある中学校を訊いた。「なんで、そんなもの訊きたがるんですか？」

女中は笑顔を作りながらも、訝しげに訊き返した。

「いやあ、こういう長閑な場所の学校って、何処か懐かしい雰囲気だったりするじゃないですか。ちょっと見てみたくて」

「普通のコンクリート校舎の学校ですよ」

女中の言葉に、裕は苦笑いを浮かべて

「それでも、東京に比べるとなんか独特の雰囲気でしょ」

彼はハハハッと笑って、美佳を見た。

「あたしも見てみたいなあ」

出来るだけ無邪気に見えるように美佳も言った。

「この山のふもとを右に、山に沿ってちよつと反対側にあります」

女中はそう言ってから

「ただ、今日はどうかしらね」

「どうしてですか？」

「なんか、昨日の晩に生徒さんが一人行方不明になって、学校は大騒ぎみたいなんです」

「行方不明？」

裕は身を乗り出した。

「それは何か事件ですか？」

「さあ、とにかく朝早く学校の先生がここにも来て、見かけた連絡下さいって」

裕と美佳は顔を見合わせていた。

「急いで朝食をとった裕と美佳は旅館を出て、村の中学に向った。まさか、あの絵馬に書かれていた娘じゃないですよね」

助手席で美佳が言った。

「西村こずえって言ったよな。書かれていた娘の名前」

「ええ……あの絵馬、効力があつたのかしら」

「まだ判んないだろ。誰がいなくなつたのか訊いてみないとな」

裕は、山のふもとに出た所で右にハンドルを切った。

旅館から十五分ほどで中学校に着いた。

白い小さな校舎と最近あまり目にしないかまぼこ型の体育館。その横にはプールもあった。校庭は驚くほど広く、グラウンドでは体育の授業をしていた。

「あれでひとクラスなのかしら」

車から降りた美佳が言った。

グラウンドにいる生徒は男子が10人ほどだった。

中学は女子と男子が別々に体育の授業を行うので、余計に少なく見えるのだろう。

二人は、来客用の玄関口から校舎へ入ると、職員室に向かった。

「雑誌記者が何の用です？」

ちようと職員室に残っていた教頭が訝しげに言った。

「ここの生徒さんが一人行方不明とか？」

「何処からそんな話を嗅ぎつけてきたんです？」

「いやあ、他の取材で泊まっていた旅館で偶然聞きました」

「それについては今調べてる最中ですのでお答えできませんね」
教頭はそう言って取り合おうとはしなかった。

「こんな事はよくあるんですか？」

「はあ？ な、何の事です」

「だから、よく行方不明の人が出たりするんですか？」

「行方不明くらい何処でもある事でしょう。人知れず事故に遭っていたり、怪我をして動けなかったり、家出したり」

教頭はそう言っただけで裕と美佳を廊下まで促すと

「さあ、話すことはありませんのでお引取り下さい」

終業のチャイムが、長閑に鳴り響いていた。

二人は仕方なく入って来た玄関口に向った。

その時、ちょうど体育の授業から帰る途中の生徒たちが目の前を通り過ぎた。

どうやら外にいた男子と同じクラスの女子は、体育館で授業をしていたらしい。

その中に千春の姿があった。

「千春ちゃん」

先に目を止めたのは美佳だった。

他の生徒も一斉に振り返ったが、千春の瞳だけは脅えていた。

美佳は千春に駆け寄った。

「千春ちゃん。ちょうどよかった」

美佳はそう言っただけで笑みを浮かべると

「昨晚この学校の生徒がいなくなったらしいんだけど、何か知ってる？」

「し、知りません。あたし、何も知りませんから」

千春はそう言っただけで、他の生徒に紛れて階段を上がっていった。

美佳もそれを追いかけるわけには行かなかった。

仕方なく二人は旅館に引き返すと、再び昨日の神社に足を運んだ。

周囲の木立から降り注ぐ木漏れ日が、石段を照らしていた。

紅い鳥居を潜ってやしろの横の板の裏を覗き込む。

「無いぞ……」

昨日確かに在った、黒い地獄絵馬は無くなっていた。

「何処にいったのかしら」

美佳もそう呟きながら、念のために周囲の足元などを見渡す。

何処を探してもあの黒い絵馬は無かった。

地獄通信レポート

学校が終わる時刻、裕は美佳と一緒に山の入り口で千春が通るのを待っていた。

「千春ちゃんが絵馬を持ち帰ったのかしら」

美佳は、裕がくゆらせるタバコの煙を片手ではらいながら言った。

「どうか……それならいいんだけど」

裕は携帯灰皿にタバコをもみ消した。

「どういう事？」

「さあ、俺にも判らん」

その時、自転車に乗った千春が山のふもとに沿った道から現れた。彼女は二人の姿を見つけると、ハツとして表情を曇らせる。

裕は千春の行く手を塞ぐように立ちはだかった。

「危ないじゃないですか。どいてください」

裕の目の前で自転車を止めた千春は、彼と目を合わせようとはしなかった。

「昨日の絵馬を持ち帰ったのは千春ちゃん？」

美佳も近づいて、そう問いかけた。

「絵馬？ あの絵馬無くなってるんですか？」

千春はそう言って俯くと「やっぱり……」

「やっぱりって、どういう事だ？ 行方不明になっているのは、あの絵馬に書かれていたこずえという娘なんだろう？」

裕は千春の腕を思わず掴んだ。

「知りません。あたし知りません」

千春は裕の腕を振り払うと、再び自転車を走らせた。

「追わなくていいの？」

千春の後姿を見つめる裕に、美佳が言った。

「今は止めてこう……」

この村にも繁華街は存在した。と言っても、飲み屋と小料理屋、そして雑貨や金物屋が数件連ねるていどの小さいものだ。

裕と美佳はそこにある一軒の飲み屋に入っていた。

情報の収集は人が集まるところに限る。と言う基本に返ったの事だった。

「いなくなった中学生って、あれかね。地獄流しの絵馬にでも書き込まれたのかね」

「そんなわけないだろ。だいいち、今時祭りの時以外地獄絵馬なんて売ってないし」

小さなテーブルに着いていた裕と美佳の二人は、カウンターで話す男の会話に耳をそばだてていた。

「あのう……地獄絵馬って、真つ黒い絵馬ですよ」

裕が立ち上がって、二人の男に近づいた。

「あ？ ああ、そうだけど。あんた誰？」

「いやあ、僕たち観光で来たんですけど。地獄絵馬って、普段は売って無いんですか？」

「なんだ、地獄絵馬を買いに来たのか？」

「いや、そう言うわけでも無いんですが、ついでに買えたらなあって思ってたもので」

裕は終始愛想よく話していた。

「昔は何時でも売ってたけどな、今は祭りの時にしか売らんよ。縁起が悪いちゆうてな」

もう一人の男がグラスを片手に

「けっこう都会の連中は珍しがって土産に買っていったりしてたんだけどな」

「でも、地獄絵馬って、誰かを地獄に流す為の絵馬なんですよ」

「まあ、そんな言い伝えがあるのは本当だけど、お土産用の絵馬で地獄流しは出来ねえよ。念がこもってないからな。いくら恨みを晴らしたい本人の念が強くて、絵馬自体に効力が無い」

「じゃあ、もし恨みを抱いている本人が自分で作った地獄絵馬だったら？」

二人の男は同時に裕を見つめると、ワハハハッと大きな声で笑った。

「そんなもんで地獄流しが出来たらみんなやつとるだろうが」

「そうですね」

裕は思わず苦笑して見せると、自分の席に戻った。

しかし、席に戻った裕を振り返った男の一人は

「でも、昔はそうやって恨みの念を込めたって話だけだな」

「昔は手作りだったんですか？」

「そりゃ、そうだろ。今みたいに土産用なんて無かったんだから」

裕はスツと真顔に返ると

「地獄流しって、本当にあるんですかね」

カウンターにいた二人の男は、顔を見合わせると再び大きな声で笑った。

「あんだ、面白いあंच्याんだな」

一人がそう言うと、もう一人は酔った顔を精一杯真顔にして

「だけど、昔からこの村ではちようくちよく人が消えるのは確かなんだ」

「人が消える？」

「地獄絵馬を売らなくなったのも、5年前に次々と行方不明者が出て、みんなが地獄流しだと騒ぎ出した為なんだ」

「5人もいなくなっただんですか？」

思わず美佳も身を乗り出した。

「30年以上前には、20人が次々といなくなった事もあったそう
だ」

「20人も？ 警察は捜査したんですか？」

「一応な」

「一応？」 美佳が言った。

「こんな辺ぴな村だから、適当に山とかを探して、それで終わりだ

つたらしい。現に5年前の時もそうだ。手掛かりなんてありゃないしな」

「でも、地獄絵馬は？ 神社に掛けるんですよね」

「あの絵馬は、願いが聞き届けられると消えるらしい。だから、もし消えた人間の名前が書かれた地獄絵馬があつたとしても、消えて無くなるから何も残らねえんだとさ」

裕と美佳は顔を見合わせた。

千春の願いは届いたのだ。

彼女が自分でこしらえた地獄絵馬は、それゆえに依頼者の念は尋常ではなかった。

恨みの念が届き叶えられた為、あの絵馬は消えたのだと、二人は同じ考えを巡らせていた。

翌朝、旅館をチェックアウトした裕と美佳は、再び千春を問いた
だそうとは思わなかった。

学校まで来た二人が見たのは、楽しげにクラスメイトと過ごす千
春の姿だった。

「地獄絵馬の依頼を受けるのも、同じ地獄少女なのかしら」
校庭の金網に手をかけて美佳は言った。

「どうかね……」

「こずえは本当に地獄に落ちたのか？ 本当は何処か近くの河の底
にでも眠っているのではないか……いや、何処かに監禁されて生き
ているのではないか？」

「そんな思いが裕の中にはあって、どうしても地獄流しを完全に信
じる事は出来なかった。」

「だから、関わるなと言っただろう」

後から声が聞こえて、裕と美佳の二人は同時に振り返った。

「柴田はじめ……」

声を出したのは美佳だった。彼女は出版関連の資料で、彼の写真
を一度だけ目にしている。

髪は短くして、顎鬚ばかりが大分目立つが、確かに資料で見た柴
田の顔だった。

「なに？ やっぱりあんた、柴田さんだったんだね」

裕も声を上げた。

「どうしてここへ？」

「さあね」

柴田は、そう言いながら金網越しに校庭で体育の授業を受ける少
女達を眺めた。

「地獄流しに関わっても、部外者にはどうにもできない。ただ虚し
さが残るだけさ」

「あんたも昔地獄少女を追っていたんだろ？」

「ああ。そして地獄流しをくい止めようとした」

「止めよう？」

裕は怪訝な表情を浮かべると

「地獄通信にアクセスした人間がどうして判った？」

「俺たち柴田家の先祖は、閻魔あいを生み出す事に関与していた」

柴田はフツと一瞬自嘲的な笑みを浮かべると

「その因縁なんだろうな。俺の娘は閻魔あいが見たものを瞳の裏側に投影する力があつた」

「閻魔あいが見たものを？」

「彼女が見たもの、すなわち依頼者の映像が、娘の瞳に飛び込んでくるんだ」

「今でもそうなのか？」

裕の問いに、柴田は首を振った。

「3年前に決着はついた。そして、それ以来つぐみには閻魔あいの見たものは届かなくなったんだ」

「それで？ 地獄流しは止められたのか？」

「いや、結局一つとして止められる事は無かつた」

柴田は裕に顔を向けると

「そして後に残るのは、激しい虚しさで切なさ。やりきれない無常な思いだけだつた」

美佳は柴田の顔を見上げて息を呑んだ。

柴田は話し続けた。

「地獄流しは逆恨みであつても、その念が強ければ成立してしまう。罪もない善人が、時には地獄へ流されるんだ。だから俺は止めたかつた。しかし、自分の先祖が犯した罪によって閻魔あいを生み出してしまったと知った時、すべてを放棄した。その代わりに、全てを書き綴った著書を出版した」

「今何処に住んでるんですか？」

美佳の問いに柴田は答えなかつた。

柴田は話し終えると、裕と美佳の前から去っていった。
「娘さんは今何処に？」その問いかけは、裕の喉元で留まった。
地獄少女の瞳に映った数々の怨念を見てきた少女。彼女が平穩に
暮らしている今を、妨げる気にはなれなかった。

新幹線で東京に戻った二人は、直ぐに本社に向った。

その月に発刊したボルカには、地獄通信の記事の代わりに地獄絵
馬について記載された。

もちろん、県名も村名も伏せてあった。

しかし、驚いた事にその後の読者からの投書で「自分らの町にも
地獄絵馬の流布がある」というものが数十通届いた。

真偽は解らないが、地獄絵馬の言い伝えはあの村のものだけでは
ない事は確かだろうだ。

VoI・13 (前書き)

終盤は、少し「地獄少女」らしい展開で行きます……
しかし、閻魔あいには継続者ですのでご了承下さい。

裕と美佳の地獄通信の追跡は続いていた。

相変わらずそれにアクセスした人物を特定する事は出来なかったが、数日に一人は忽然と消える者がいるのは確かだった。

もちろんそれは関東に限られた事ではない。

本当の行方不明者か、または異国の拉致かもしれない。そして全国に行方不明者を全て調べる事は出来ない。

それでも、身近に事件があれば警察とは違った方向からの聞き込みを続けた。

地獄少女の目があれば……あの時の柴田の話を思い出して、裕はついそんな事を考えてしまう。

次の記事の締め切りも迫っていたが、これが地獄流しという明確な事件にはなかなかありつけない。

物的証拠が何も無いのだ。

アクセスした本人の履歴は無いし、ワラ人形も消えてなくなるといふ。

地獄流しの現場を見る意外に、裕に確信を抱かせる事は難しかった。

そんな時、ちょうど二人が取材をしていた近くで、大物政治家の田中康成が襲われた。

暴力団の鉄砲玉によつて、射殺されたというのだ。

社から連絡を受けた裕と美佳は、直ぐに急行した。

ホテルの裏口は野次馬でごった返していたが、報道陣はそれほどいなかった。ほとんど先陣に近い状態だ。

こういふ報道には大柄な一眼レフは不要だった。

車から降りた裕は、走りながらジャケットのポケットに手を突っ込んでコンパクトタイプのデジカメを取り出す。

コンパクトとは言え、6百万画素もあれば充分過ぎるスペックだ

った。

裕は強引に野次馬を掻い潜って前へ出た。

身体の小さい美佳は、群集に一瞬押し戻されたが、太った男を見つけると、そのすぐひざ下を潜るように身を屈めてすり抜けた。

ちょうど田中は担架に乗せられて、ホテルの裏口から運び出されるどころだった。

田中康成はまだ夕刻だと言うのに、ホテルの自室で浴衣姿だったようで、どう考えても女性と一緒だったのが明らかだった。

しかし、秘書たちの配慮で女性の姿は何処にも無かった。が、そんな事は一瞬でもよくなっていた。裕にとって、もっと重要な事が目に飛び込んで来たのだ。

まさかこんな所で目にするとは思ってもいなかったもので、一瞬目を疑った。

裕は思い出したように慌ててカメラのシャッターを切った。

改造を加えてシャッター音を消していた為、混乱の中でそれを制止する者はいなかった。

カメラのレンズが捉えた田中康成のはだけた浴衣の胸元には、柴田が著書で綴った刻印が刻まれていた。

小さな炎の欠片を一つの輪で括った紋章。

そう、地獄少女と契約を結んだ証の刻印だ。

田中が数年前外務省の大臣の座を争っていたある政治家が、忽然と姿を消した事件を思いだした。

スポーツ誌部にいた彼にも、その騒ぎは十分に届くほど連日の報道が続いた。

その政治家は結局見つからなかったようで、田中は難なく大臣の座に着いた。

そこで力を発揮出来たのは確かに田中の実力かもしれないが、大臣の就任にはきつとこの胸の刻印が関係していたに違いない。

あの消えた政治家は二度と見つからない。地獄に流されたのだから……

そして彼はその後も勢力を広げて今に至るのだ。
しかし、これで彼も今頃は地獄の入り口へ案内されている事だろ
う。

美佳を呼ぶ間もなく、救命処置の必要も無いその担架は野次馬を
かき分けて歩道に乗り上げた救急車に運び込まれた。

* * *

「これが、地獄流しを果たした刻印？」

裕の撮った田中康成の写真を見て、美佳が言った。

「俺も実際に見たのは初めてだから、びびったよ」

「じゃあ、田中は誰かを地獄へ流したって事ね」

「政治家なんて、しょせん自分が這い上がる為なら手段を選ばない
って事だろ」

裕は資料室の椅子に座ったまま、後に大きく背もたれに寄りかか
った。

「この刻印は消えないのかしら」

「柴田の話じゃ、一生消えないらしい。地獄へ行く証だからな」

美佳は裕の撮った写真を意味ありげにマジマジと見つめていた。

そして、心の中で何かの迷いが弾け飛ぶ。

その様子に裕は何一つ気付く事はなかった。

美佳は何かを決心していた。

彼女が地獄通信を追いかけける意味は、裕とは違うところにある。

彼女は彼女の信念の元にそれを追いかけていた事は、編集長の中
村勝司すら知らない。

彼女が裕の下に着いたのは、編集長の命令ではない。予てからの
彼女の希望だったのだ。それが、たまたま裕の担当に重なっただけ
なのだ。

「なあ」

裕に声を掛けられて、美佳は我に帰ったように声をだした。

「えっ？」

裕は驚く美佳を一瞬見つめると「腹減らない？」

「そ、そうね。何か食べましょ」

彼には、彼女が数日前からこっそりとバックの中に忍ばせている黒いワラ人形の姿など、知る由もなかった。

美佳の両親は彼女が高校一年生の時に、自宅に押し入った強盗によつて殺害された。

容疑者は一度逮捕されたが、証拠不十分で釈放、その後不起訴となった。

そして美佳は、その犯人について調べる為に雑誌記者になった。豊富な資料や、聞き込みのノウハウも学べる。犯人に辿り着くチャンスが多いはずだと確信していた。

美佳は仕事の合間、あつて無い様な休日を使い、ひたすら当時の犯人の事を調べた。

北川照夫。当時検挙され不起訴になった男が両親を殺した犯人だと確信にいたるまでそう時間はかからなかった。

深夜、たまたまトイレに行った彼女は、そのドアの隙間から奴の顔をハッキリと見ているのだ。

その証言があるにも関わらず、暗闇での犯行という事で彼女の証言は立証されず、他の証拠が見つけれないまま捜査は難航した。

彼女には判っている。犯人はあの男しかない。

しかし、彼女はどうかやってその恨みを晴らせばいいのか判らない。そんな時、短大の友人から地獄通信のうわさを聞いた。そして数年後、自分がその記事に携われる事になったのだ。

恨みを晴らしてくれる地獄通信は本当に存在するのか……

半信半疑の裕が真剣にその噂を追う姿を見ているうちに、彼女自身も何時しか自分の恨みより、その真相の究明に没頭していた。

しかし、数日前北川が幼児殺害の容疑で逮捕され、再び証拠不十分で不起訴になる事を聞いて、美佳は自分の信念を蘇えらせた。

あの男は犯罪を犯している。

今回の事件がもし白だったとしても、美佳の両親を殺した事実是不変ならない。

いや、おそらく今回の少女殺害も奴が手をくだしたに違いない。美佳には自分でもよく判らない確信があった。

風の無い静かな夜だった。

深夜零時、美佳は地獄通信にアクセスした。

内に秘めた怨嗟の思いはやはり本物だったのだろう。

あっけなくそれは繋がり、震える指で送信ボタンをクリックした。もちろん書き込んだ名前は北川照夫。

静寂に包まれた帳の向こう、突如、台所から物音がした。

美佳がそつと部屋の仕切り戸を開けると、そこは黄昏に染まる草原の中だった。

大きな樹木が一本、茜色に染まる空を背景に黒々と聳え立つ。その距離は、とても遠くにあるようで、近くに感じた。

美佳は恐る恐る足を前に踏み出す。

樹木の幹の横には少女が立っていた。逆光に照らされた長い髪が風ではためいて、ゆらゆらと揺れている。

白い肌に灯るような、夕陽に負けないほどの紅い瞳が美佳を見つめていた。

「呼んだ？」

少女は小さな声で言ったが、それは頭の奥からはっきりと響くように聞こえた。

「あなたが……地獄少女？」

「私は閻魔あい」

「後継者……て聞いたけど」

少女は小さく頷いて「それはあなたたちには関係の無い事」

抑揚のない静かな喋り方だった。

そして、少女は右手を美佳に差し出す。

「受け取りなさい」

右手のひらに乗せられているのは黒いワラ人形だった。頭の部分

には紅い糸が結ばれている。

美佳が差し出された人形を手に取ると

「あなたがほんとうに恨みを晴らしたいと思うなら、その紅い糸を解けばいい。糸を解けば契約は正式に交わされて、相手は速やかに地獄へ送られる」

地獄少女は言った。

「ほんとうなの？」

地獄少女はそれに応えずに続けた。

「ただし、誰かを地獄へ送ればあなたにも代償を支払ってもらおう。人を呪わば穴二つ。あなたも地獄へ落ちる」

無表情な彼女の紅い瞳が薄っすらと笑いを浮かべたように見えた。

「死んだ後の話だけだ」

「柴田はじめの書いた事は全て事実だったのね」

美佳の問いに地獄少女は応えなかった。

まるで、自分の見ているものが真実だと示すように……

一瞬の闇が美佳を包み込んだ。

それまで見ていた逆光の夕陽が、全てを飲み込むような漆黒へ変わる。

瞬き一つの間だった。

美佳は再び自分のアパートの、ほの暗い台所に立っていた。

手にワラ人形を握り締めて。

光のカーテンに包まれながら、緑の草原に少女が佇んでいる。強い風が草原の草木を大きく揺らして、背の低い雑草の絨毯が小波のようにそよいでいた。

「彼女を止めて」

「キミは誰だ？」

「急いで、彼女を止めなきゃ」

「彼女って誰だ？」

「高岡美佳さん」

「美佳？ 美佳がどうした？」

「地獄通信にアクセスしたのよ」

「何？」

「早く止めて。彼女は糸を引くわ」

「キミは誰なんだ？」

瞳の大きな少女は、裕の問いに答えないうまま草原と共に彼の脳裏から消えた。

裕はベッドの上で飛び起き、その勢いで額の汗が飛び散った。

……美佳が地獄通信に？

裕は急いで家を出ると、車に飛び乗って美佳のアパートへ向った。深夜の帳は、僅かな街路灯の光も飲み込んでしまいそうな静けさに満ちていた。

彼女の家の前に来た時、美佳がタクシーに乗り込むのが見える。

「美佳の奴、こんな時間に何処へ行くんだ……？」

裕はそのタクシーを追った。

住宅街を抜けて、大通りをしばらく走ると、路地を曲がって再び住宅街に入る。上り坂を越えて少し下ると平坦な道に辿り着いた。

「ここは？」

裕は目の前の大きなマンションを見上げていた。そこは今、美佳が入って行った場所だ。

やたらムシムシするのは、急に湿度が上がったせいだろう。薄っすらと白い霧が路地を這うように取り巻いている。

「ここに何があるんだ？」

裕は美佳の後を追ってマンションの自動ドアを抜ける。大理石調の瀟洒な床に彼の靴音が小さく響いていた。

エレベーターの前に来ると、彼女が乗ったエレベーターが既に階を上がっていくのが判る。

裕は、それがどの階で止まるか階数ランプで確認していた。

そのランプが6階で止まるのを見て、彼は隣のエレベーターに急いで乗り込む。誰も使っていないので一階に停止したままなのはわかっていった。

6階に着いた裕は周囲に注意を払いながら通路へ出た。

右側に部屋が並び左側には転落防止の柵が立って、その向こうは暗がりの夜景が続いている。

深夜も遅い時間の為、電気の灯っている一般住宅はほとんどなく、霧で僅かに霞む遠くの高層マンションの明かりが、やたらと目だつて見えた。

通路に人影は無い。当然だが、美佳は既に何処かの部屋に入っているのだろう。

「くそつ、あいつ何処に入ったんだ」

一部屋ずつチャイムを押すしかないのか……

「612号室だよ」

背中が声が聞こえた。

裕は驚きと共に振り返るが、さらに驚愕した。

着物姿の女が転落防止の柵の上に立っているのだ。

僅か10センチほどの幅しかない柵。そんな場所に普通の人間が立てるはずがない。

真っ白い肌に切れ長の目、尖った顎。この世のモノとは思えない美形な顔立ち。着物の衿がはだけて、豊満な胸の谷間が露になっていた。

……以前美佳が見た女性か？ 裕は直感でそう思った。

「お前は誰だ？」

裕は彼女の奇妙な装いに、『キミ』ではなく『お前』と言った。

「そんな事より、早く行った方がよくないかい？」

女は整った唇で微笑んだ。

それを聞いて裕も慌ててきびすを返すと、612号室へ走った。

ドアの鍵は開いていた。表札は出ていない。この部屋の主が誰なのか判らないまま、裕は躊躇する事無く612号室のドアを開けて中に入った。

奥の部屋で声が聞こえた。

「あんたが犯人なんでしょ」

「しらねえよ。不起訴って事は、白だったって事じゃないの」

美佳の声と、男の方は……誰だ？

裕は廊下をゆっくりと進みながら耳を澄ました。

「証拠が不足してただけでしょ。6年前に強盗で入った家の夫婦も殺したわね」

「6年前？ そんな昔の事、覚えてねえよ」

「あたしはその家の娘よ」

「お前が……？」

「やっぱり覚えてるじゃない」

「あの夫婦、大人しく金だけ出しやいいものを、俺に飛び掛ってマスクを剥ぎ取りやがった。顔を見られたら、殺るしかねえだろ」

「人殺し……」

「証拠はあんのかよ。どうせ顔なんて、暗がりでしか見てないんだろ。目撃証言が却下されるくらいだからな」

男の薄ら笑う声が響く。

「証拠なんてもう要らないのよ……」

彼女の声は震えていた。

その言葉を聞いて、裕は慌てて奥のリビングの戸を開けた。

「止める、美佳！」

裕は美佳の身体に後ろから掴みかかった。

彼女の右手の指は、ワラ人形の頭に結ばれた紅い糸の先をつまんでいた。

「ダメだ、引くな！」

糸が動いた。

リボン結びの輪がスツと小さくしぼんだ。

しかし、そのすばみは直ぐに止まった。

裕の手が、美佳の手の上に被せられて動きを封じたのだ。

「ひ、聖さん。なんで？」

「止める。この糸を引いちゃダメだ」

「でも……」

「ダメだ」

裕はそのまま美佳の肩を抱いた。

「何だよお前ら。人の家にいきなり来たと思ったら、言いがかりの次はいちやつきを見せびらかすのか？」

「コイツを葬るなら、ルポライターとして恥じない方法を取ろうぜ」

裕は男の声を無視するかのように、美佳に言い聞かせた。

夜の帳は善と悪の区別をしない。

何が善で、何が悪なのかは、見る者の視点でいくらでも変わってゆくのだ。

それを判断する基準は道徳や秩序。しかし、それが届かない場所に恨みを抱いた時、地獄の使者は依頼を受け取る。

しかし、最後に決めるのは、依頼者本人だ。

「証拠が無いんだ。俺は掴まらない」

北川はそう言つて、二人の背中に向つて笑つた。

「お前、さつき自分で罪を認めたじゃないか」

足を止めた裕は、ポケットから小さなメモリーレコーダーを取り出して、北川に向けて見せた。

彼の指が小さな再生ボタンを押した。

『あの夫婦、大人しく金だけ出しやいいものを、俺に飛び掛つてマスを剥ぎ取りやがった。顔を見られたら、殺^やるしかねえだろ』

「雑誌記者をなめてもらつちゃ困るぜ」

北川の唸る姿に背を向けると、裕は美佳を促して部屋から出ようとした。

北川は、リビングのサイドボードの引き出しから何かを取り出すと「このまま帰せるか」

そう叫んで、走りこむように裕に体当たりした。

ズサツと乾いた音が微かに聞こえた。

裕は自分の腹部に冷たく鋭い痛みを感じた。

「聖さん……」

崩れそうな裕の身体を、美佳が慌てて支える。

彼の脇腹から血が滲んで、ジャケットの隙間から見えるシャツを

濡らしていた。

「二人共ここから帰してたまるか」

北川の目は瞳孔が開いて焦点が合っていない。

裕を刺したアーミーナイフは、つや消し黒の上にラズベリーを垂らしたような血の色を滴らせて、未だ男の手に握られている。

裕の意識は朦朧として、膝が折れたかと思うと、そのまま床に転がった。

「聖さん」

「お前も終わりだ。黙ってりゃ、生きて平和に暮らせたものを」

北川がナイフを構え、美佳に向って足を踏み出した。

しかしその時……

『決めるのは、あなた』

美佳の脳裏に声が過った。

自分が死んだら、裕も死ぬ。彼を助けなければ……

その刹那、男の姿はリビングから消えた。いや、この世から消えたのだ。

チリンツ………何処からともなく微かに鈴の音が聞こえた気が

して、美佳は思わず天井を見上げた。

「み、美佳………どうして………」

裕は自分の脇腹を押さえながら、朧気な意識の中で美佳を見上げていた。

天井に埋め込まれた照明器具の光が逆行になって、佇む彼女の姿は黒い影になって見えた。しかし、裕の視線は捕らえる。

彼女の右手には、ワラ人形から解いた紅い糸が握られて、エアコンの風に僅かに揺らいでいた。

「これでいいのよ。だって、聖さんを死なすわけにはいかないじゃない」

美佳は急いで救急車を呼ぶと、床に膝を着いて裕の頭を自分の胸に抱いた。

「お前、どうして地獄通信なんか………」

「喋らないで」

美佳は彼の頬に手を当てた。

誰かを地獄に送ったその手は、あまりにも温かかった。

裕は消え行く意識の中で、彼女のキャミソールの胸元にチラリと見える火炎の刻印を、悲しげに見つめていた。

.....
.....
.....

裕は病院のベッドで目を覚ました。

窓から注ぐ光に一瞬目を細める。

天井を見上げながら、虚ろな思考で何故自分がこんな所にいるのか考え、あのマンションでの出来事を思い出していた。

着物の女……美佳の手に握られていたワラ人形……そして、彼女が解いた紅い糸……消えた男。

……あれは夢ではないのか。アレが事実なのか？ あれから何日経ったんだ。

彼は病室の中に、時間経過の判るものを探すが、それらしいものは見つからない。

テレビの横にある小さな時計は11時10分を指していた。

窓から差し込む確かな陽の光は、午前11時なのだろう。

美佳は？ 彼女はどうしたのか？

美佳の事が気になってベッドに起き上がろうとした裕は、脇腹の激痛に、自分に起こった出来事を再び思い出す。

……そうだ、俺は刺されたんだ。

美佳は俺を助ける為に……自分が奴に殺されたら、いや死なないまでも自分だけが逃げたとしても、俺を助ける者がいなくなる。だ

から、彼女はあの時糸を引いたんだ。

そして奴は消えた。

裕は霧のように消えて無くなる北川の姿を確かに見た。

あれが地獄流しなのか……あれが地獄少女の成せる技なのか。

裕は天井を見上げたまま、目の当たりにした地獄流しの現場を思い出していた。

「あら、もう気がついたの？」

病室のドアが開いて声の方へ視線を向けると、美佳の姿があった。彼女は洗濯したタオルの替えを沢山手に持って、裕のベッドの横まで来ると、戸棚にそれをしまい込んだ。

「美佳、おまえ……」

裕の何とも頼りない、今にも泣き出しそうな顔を見下ろして、美佳は微笑んで見せた。

「どうしたの？ そんな子供みたいな顔して」

「お前、どうして地獄通信に……」

「……もう全て終わった事よ」

「でも……」

美佳は、そつと身体を折り曲げて裕に顔を近づけると、そのまま彼の唇を塞いだ。

二人の小さな吐息が交錯すると、窓から入る初夏の風がそれを優しく包み込んだ。

都心に在るはずのその場所で吹く風は、庭木の緑をイッパイに含んだ木の葉の香りがして、屈んだ美佳の胸元に見えた黒い刻印が、何故か裕の目には希望の印に見えた。

了

地獄通信レポート

Vol. 16 最終話（後書き）

初めてのファンフィクションと言う事で、色々な戸惑いもありましたが、最後まで読んでいただいた方には大変感謝いたします。

『閻魔あい』のファンの方には面白い話ではなかったようですが、私自身は『地獄通信のある世界』というものに惹かれ、原作のラストを崩さない形でその数年後の世界を書いたつもりですので、ご了承ください。

暇つぶしになった方がいれば幸いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4497c/>

地獄通信レポート

2009年3月24日10時25分発行